

舞姫が私たちに教えていること

私は「舞姫が私たちに教えていること」というテーマを設定した。

このテーマにした理由は、冒頭の部分で「昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を、筆に写してたれにか見せん。」とあるのに、豊太郎（実際書いているのは鴎外だが）は書いている。ということは、何かしら言いたい事があるから書いたのではないかとふと思ったからである。

では結論として何を伝えているのか。それは、よく考えて信念に嘘をつかず発言することの大切さと私は考えた。

今回この話は最終的にエリスがパラノイアになり、豊太郎は日本に帰って終わった。なぜエリスはめっちゃくちゃになってしまったのか。豊太郎は相沢のせいにしつつあるが、元をたどれば豊太郎の発言が原因である。

豊太郎が相沢に「エリスと別れろ」と言ったとき、豊太郎はそれを約束した。豊太郎はエリスを愛していたし、その愛も捨てがたい。だが「余は守るところを失はじと思ひて、己に敵する者には抵抗すれども、友に対して否とはえ答えぬが常なり。」とあるように、友達には嫌と言えない性格だったとある。これをうけてか、相沢は天方に「彼にしがらみはないですよ」と言っている。だから天方は安心し、豊太郎に日本帰国の話をもちかけた。もちろん彼が豊太郎の能力を認めた上でだ。さらに豊太郎が倒れたとき相沢はエリスに、豊太郎が別れる約束をしたことや帰国の話をした。そして彼女はパラノイアになってしまった。深く考えずに発言したために、結果エリスを傷つけてしまった。

そして豊太郎自身もそのせいで苦しむはめになった。天方にロシア行きを承諾したときに「この答え～しばなり。」とあるように、決してすぐに決断したのではないのに承諾してしまった。それによりロシア同行で天方の信用を得て、帰国の話をもちかけられた。そこには先ほど述べたように相沢の助言もからんでいる。そのとき豊太郎は相沢の発言を撤回することもできず、後には戻れなくなってしまった。そして「我は許すべからず罪人なり」と自分を責めた。さらに最後は友とする相沢を恨むようになってしまった。しかしこれらは結局、自分の発言により起こった出来事なのだ。もっとよく考えて返事をすれば、信念通りに発言できたら、このような事態は免れたかもしれない。

以上よりこの話は、よく考えて発言する事の大切さを私たちに教えてくれていると思う。疑問に感じたのは、なぜ鴎外は「豊太郎」という人物を設定してかいたのかである。場面も時代も鴎外自身とほぼ一致するのに、敢えて豊太郎でかいたのがよく分からない。